
三世界戦争 ～神と王と少女と～

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三世界戦争 ～神と王と少女と～

【Nコード】

N7241E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

この世界には、三世界が存在する。その世界において均衡が破られる。それは誰であり、辿る道は輪廻がごとく辿れない。そして、三世界に巻き起こる戦の風。その中で三世界の俺たちは均衡を取り戻せるのか。

前説・天界（前書き）

報告です。

少々厄介なウイルスにやられていたため、現在はHDDの入れ替え作業を残すところになり、もうしばらく作業がかかりますので、予定していた三世界戦争の更新は21日あたりを目処に変更します。

バックアップを取る間がなかったので、新たに執筆も、仕事の執筆に差し支えてしまうので、しばらくお待ち下さい。

代わりに新小説を連載します。ラノベ系ですが、仕事の執筆用PCに入れていたものがあつたので、加筆して連載すると共に、solaも少し更新します。

予定日は17日にしますので、連載が滞ってご迷惑をお掛けしますが、ご理解をよろしく願います。

ちなみにsolaは18日か19日です。17日は新小説のみとなります。

さらにですが、新たに仕事が入りまして、そちらを優先させねばならないため、今後の更新順序に若干の偏りがあるかもしれませんことを、先にお詫びいたします。

前説・天界

天上天下には、三つの世界が対を成す。欠ければ失い、出れば失う。均衡ゆえの安寧。人は天を犯さず、天は魔を犯さず、魔は地を侵さず。共存ではない共生。干渉のない存在。ただあり続け、時に祈り、時に憎み、時に悲しみ、時に歡喜する。それは全てが祈り。人は天と魔へ祈り、天は魔と地へ祈り、魔は天と人へ祈る。願いが善悪の何ものであるうとも。

潰えた均衡は破壊を呼んだ。

破壊は再生への初階。芽生えることすらなかつた世界への干渉。天は神と使いにより、魔は王と従えにより、人は長と利器により、その均衡を打ち破る。神聖、邪悪、欲望。三世界にある分裂を結ぶものとして。

天は、人と魔を調停せしめるべきであり、侵しむる者あらば、無垢なる力を用いて浄化せよ。

魔は、天と人を服従せしめるべきであり、侵しむる者あらば、暗黒より力を用いて屈服せよ。

地は、天と魔を治むる器であるべきであり、侵しむる者あらば、制圧なる力を用いて統治せよ。

三世界に掲げられし力。破られし均衡の先にある世界を手にするべく、三世界は戦を争うに仕えるべく一時の安寧の中にある。

「神様？ 神様あ？ どこですか？」

天界は七つの層に分断される。その最上界の空間に浮かぶ島、アポロス。幾つものミルキーウェイという羽で作られた道が最上界第七天、アラボトに降り立つ。そこに居るものたちは皆純白無垢のつばさを携えている。だが、アラボトに居るものたちは地上界の女性を象る女天ばかり。一重の真白のローブを身体に巻き、それぞれが課せられし責務に勤しむ。

アラボトの界下にある第六天、ゼブル。アラボトとはまた異なる大天子と呼ばれる天界階級第三位に付随する天使が三世界の秩序、地上界の星々の管理、運行、また天界での神よりの御言葉の伝達、天界全ての天使の教育、守護天使の管轄と多岐に渡る重要を司り、中級一位から下級三位までの天使はゼブルの大天子の下に存在する。

ゼブルの界下第五天、マテイ。六天までとは異なり、マテイはかつて地上を殺戮に貶めた天使たちの幽閉の為の天界における闇を司る、永久の牢。天使が墮ちる時、マテイに集う闇を背負い魔界へと天使は落ちていく、その場。

マテイの界下第四天、マコノム。地上の祖となれしアダムとイブの犯した禁忌、知恵の木が根を張り、天使楽隊が音色を奏でる安らぎの界。エデンと呼ばれる広大にして地上界の源の園がどこまでも鎮座する安寧の地。

マコノムの界下第三天、シエハキム。マコノム同様に緑豊かに恵みの地として香り高い風の吹きぬける神の休息の地として機能している。だが、マコノムと絶対的相違が存在し、シエハキムは神直轄の生命の木が芽生えている。安息の北の一方で、南方の地はマテイを越すつ暗黒の焰の地と化し、天界天使の断罪使による罪天使への残虐で無慈悲な処刑の地でもある。

シエハキムの界下第二天、ラキア。魔へ堕ちる墮天使の収容界。神の怒りに触れたものの辿る天界獄地。全ては神により鉄槌を下され、ラキアは天界においての流刑地を果たす。魔界よりの魔族はこの界を通し、天界との交信を持つ。

ラキアの界下、地上界と魔界に最も近い第一天、シャマイン。天使たちによる地上界への天から降り注ぐ全てのものを管轄し、魔界へ追放するものたちの一時の監獄も果たす。

七界層からなる天界。そこには界に準ず天使が存在する。アポロスにて神の元へ使える上級一位セラフィム、上級二位ケルビム、上級三位オファニムの唯一天使に続き、中級一位ドミニオンズ、中級二位ヴァーチューズ、中級三位パワーズ、下級一位プリンシパリティーズ、下級二位アーケエンジェルス、下級三位エンジェルスにより成立する天界。

その天界を収める神たるものを搜索する天使でアポロスは慌ただしさを見せていた。

前説・魔界（前書き）

最近更新しようにも、文学賞用作品の締め切りに追われていたの
で、連載作品を書く暇がありませんでしたが、少し余裕が出来ましたの
で、少しだけ更新です。

前説・魔界

時を同じくして魔界。天界とは異なり界層はない。あるものは唯一つ。フォーリンエンジェルたち、通称サタンによる暗黒による力の世界。その筆頭である魔界において絶対的支配力を発揮する女魔王、ルシファー。天界と異なるのはルシファーを筆頭にした隊が成されている。ルシファーに次ぐ魔界の力の王、ベルゼブル。悪徳の無価値なる王、ベアリル。破壊の王であり、かつて天界大天使ガブリエルに追放された好色王、アスモデウス。魔界における金鉱採掘士の名を持ち、万魔殿たる宮殿を建立した貪欲の王、マモン。強靱な肉体を持ち、魔獣を従える驕りの王、レヴィアタン。レヴィアタンが海の王であるのに対し、陸の魔獣を従える獣の王、ビヒモス。

魔界はルシファーを魔王とした六の王による支配に成立する。目下に平伏すは、レヴィアタン、ビヒモスは魔獣。二獣王以外は墮天使ならびに魔女、魔術師によって天界とは別の階級支配が存在している。

「ルシファー様」

宮殿最上部。魔界が暗黒に包まれているという中で、最上部は光が満ちていた。故に最上部を訪れることが出来るものは王の名を持つ魔界の王たちのみ。

「何？」

煌々と輝く女王の間。ベルゼブルは目を細める。美しい片顔と醜き片顔の王。ルシファーは静かに跪くベルゼブルを見る。

「地上界を回遊する魔女隊より報告です。地上界において、不穏なる動きを確認。また地上界より遣魔使の要請を仮受諾とのこと」

言葉は静かに、思慮深さと疑念、憂国の至情が表情には現れている。墮ちたとは言え、その放つ威厳には王という輝きは失われていない。

「進言するは、全ての拒否。並びに不穏なる事態の破滅。我らが魔女、魔術士隊に地上界の不穏分子の駆逐を」

「跪き、頭を下げる。王が女王に伏す。魔界にしかない、その違和と調和。ベルゼブルだからこそ、魔界と言う無限なる獄に沸く強大無比なる重責を負う王の賢者。その姿がルシファアの前にある。」

「不要だ」

だが、ルシファアは全てを却下に落とす。ベルゼブルが顔を上げ、言葉を待つ。

「何故に、そう申されるのです？」

「我ら魔が地を落とすは容易い。だが、天が居る。天は我らを治める。故に地は魔を滅す。ならばどうだ？ 託を得る機を待て」

冷たい目。片目には光を。片目には闇を持つルシファア。ルシファアの言葉にベルゼブルは不服げではあるが、力量の差を知るも王。潔く引いた。

「……天よ。懐かしき場だ」

光に満ちる宮殿最上部に鎮座すルシファアの目は、思い人を想うかのように魔の力を光の下に封じ込めた優しさを見せていた。

前説・魔界（後書き）

FCEとかユースウォーカーズとか更新を楽しみにして頂いている方には申し訳ありませんが、今月末までは、やはり前書きに書いたとおりに余裕があるとは言え、厳しい状況はあまり変わりありませんので、更新はお待ち下さい。九月頭には更新します。

続編のストックが切れてしまっているので、ちょっと遅くなりますが、ご了承くださいませ。 ともみつ

前説・地上界（前書き）

三ヶ月ほどぶりの更新です。

遅くなつてしまいましたが、これで世界観は一応出ましたので、本編にいよいよ入れます。

次の更新の予定は未定ですが、これ以上期間が空かないように気をつけたいと思います。

前説・地上界

潤いに蒼き聖上と歌われたアース。その栄華は花と消え、緑の大地は灰色に染まり、青の海は黒の油に溢れ、空には灰塵が舞い上がる。血の流れる大地も枯れ果てる緑も、破壊の連鎖に人の姿は塊へと変わっていく。

「マリアンヌ様、遣魔使の派遣団の編成が完了しました」

傳く男に、マリアンヌが戦火を逃れた庭園から静かに視線を戻す。体を滑る金髪と愁いを帯びる瞳。

「分かりました。では、早急に天上門へ派遣団を派遣して下さい。それから、恐らく魔界が動き出しているはずです。こちらの残存する兵力、武力を現段階に終結させられるものの全てをエデンに集結させなさい」

「はっ。では、彼の者たちは如何に？」

男が顔を上げる。マリアンヌは空を見上げる。厚い雲の中に神秘に輝く天上門が顔を出している。その下を照らし出す光の下、直立不動にて佇む姿があった。

「彼らは私が指揮します。この地域に生存する方達をサンシャイン公園台広場に集めてください。被害の出ないよう、地下シエルターへ非難させるのです」

マリアンヌの言葉に、男の表情が驚きに変わる。

「マリアンヌ様、とうとう……」

「人類の生き残る道を切り開くのです。この青上の星に光を取り戻すことは、人類の務めです」

「はっ。不肖、このハーバトロン、この命、姫様にお預けいたします」

胸元に腕を掲げ、一礼後、ハーバトロンは室内を後にする。それを見送るマリアンヌは、決意を固めた表情を浮かべ、バルコニーに出て行く。

「ハーツ、あなたは何を見ているのですか……?」

庭から空を眺める一人の少女。王宮と言ったつての栄華はなくとも、この世界においては華やかで雅やかな静けさを保つその庭園で、マリアンヌはその一点を見つめ続けた。

「……あ」

その視線に気づいたのか、マリアンヌが声を漏らす。見上げてくる無垢で夢愛想の視線。白髪に青い瞳。この星のかつての姿をその器に宿す姿が、マリアンヌを射抜く。

その時、少女の背中から翼が開き、空を仰ぎ、風を纏い、バルコニーに降り立った。

「どうかしたの? マリアンヌ」

姿とは異なり、その口調は自然。この宮殿内において軽口を叩く違和感は、この少女だけ。

「いいえ。それよりも、話があります、ハーツ」

「戦争?」

ハーツの言葉に、マリアンヌが言葉を詰まらせる。

「魔界に? それとも天界? もしかして、両方?」

見透かすような問いかけに、マリアンヌが視線を下げ、すぐには応えなかった。ハーツはそれに理解を見せ、肯いた。

「……そう。とうとう始まるんだね」

「この星に生きる全ての生き物の為にも、闘わなくてはならないのです」

マリアンヌの表情は芳しくない。

「大丈夫だよ。私たちがいるもん」

ハーツだけは笑顔を浮かべる。

「戦争の引き金を引いた魔界は、私たちが滅する。天界の交渉はマリアンヌ、あなたの腕次第。皆を守る為に闘うんでしょ?」

「ええ、もちろんです。それ以外にアースが生き残る術がないのです」

破壊に満ち、人類の8割はその犠牲に血を流し、生物の七割以上

が絶滅を余儀なくされた死の星。かつてこの星が青かったと言う歴史など、現実には存在はしていない。

「人間が生き残ること。アースの再生を活性させることが出来るのは人間だけ。なら、私たちは闘うよ」

「ハーツ……」

人類が星を破壊されたことには、人類の争いがある。しかし、それには人類の手だけではない。魔界よりの差し向けられた力が存在した。

「魔界は確かに強力だよ。人魔の戦争が始まって三十七年。きっとアースの歴史の中で最も凄惨な出来事だよ」

「ええ……」

アースの歴史史上まれに見る大災害。それは戦争であるが、生態系の破壊、人類文明の崩壊、環境破壊が同時に引き起こされる戦争の業であれば、終焉はもたらされる。だが、人の業に魔界は欲を見る。故に絆される者が表れ、魔の使いの魔女が圧倒的な魔力を駆使用する。人の兵器では限りがある。だからこそ破壊しつくされていく世界に、ただ見守るだけでは済まなくなった。

「マリアンヌ、もしかして、遠慮してる？」

「えっ？」

ハーツの言葉に、初めてマリアンヌの表情に大きな変化が生まれる。ハーツがそっとマリアンヌの肩に手を乗せた。

「やっぱり。だからずっと浮かない顔なんだね？」

現人類において政府機関というものは存在しない。国連、協会、機関、財閥その全てが破壊と言う魔の手に落ち、多くの国は焼け野原と化す。

「誰もいないから、本音、出したら？」

ハーツが笑む。今にもマリアンヌはその笑顔に泣きそうに小さく震えた。

「怖い……怖いよ、ハーツ」

人間は求める。己を導く存在を。その名目に見え隠れする責任の

押し付け。そこに担ぎ上げられた者は、背負う他はなく、戦火において財を成す企業の一人娘であり、自然保護奉仕団体会長と言う役を負っていたマリアンヌは、生き残った人々に担ぎ上げられた。世界は今、マリアンヌと言う少女の手の中に希望を求めている。軍事企業の一人娘の財は、戦争において脅威を持ち、自然保護団体という相反する組織に身を置き、世間の評判を集める為の人形となっていたマリアンヌ。その一人の少女が世界唯一の財力を持ち、人を導くだけの器量を兼ね備えていた。しかし、それはマリアンヌにとつては苦悩の始まりでしかなかった。

「うん、分かるよ。人間の期待は怖いもんね」

ハーツが胸に小さな体を抱き寄せる。人ではない温もりが、マリアンヌを包み込む。

人の期待は叶えば賞賛の嵐をもたらし、英雄を生み出す。しかし、叶わぬと知れたら最後、人は己らが持ち上げた人間であろうと、期待外れと言うレッテルを貼り、晒し者と血祭りに上げ、痛める。マリアンヌはまだ政に携わる知識を得てはいない。所詮は企業の娘、跡取りとして守られた存在。その描く思考は決して成熟はしていない。だからこそ、マリアンヌは知ってしまったのだ。世界の事変により知らねばならなくなり、背負うには器が足りなかった。しかしそれを見せることも許されない状況。ハーツの胸の中がせめてもの少女に戻る温もりを蓄えていた。

「私は、どうしたら良いのかな……？」

呟くは不安と言う愚痴と懸念。

「マリアンヌは、そのまま良いんだよ。今のアースはどこにも平和なんてない。だから、皆が不安に思ってる。マリアンヌが哀しいと、誰も笑ってくれないよ。だから、マリアンヌは笑ってて。泣きたい時はいつでも私が傍にいるから。だから、今まで通りで大丈夫だよ」

そっとマリアンヌを抱く腕に力を入れ、頭を撫でるハーツ。人のように豊かな表情ではないにしろ、その優しさは人の感情そのもの

だった。

「少しは、楽になれた、かな？」

不安げな声色のハーツに、マリアンヌが顔を上げる。

「うん。ありがとう、ハーツ」

少女らしいその笑みに、ハーツも小さく笑った。

「じゃあ、私たちも準備しないと。マリアンヌ、少しの間の辛抱だよ？」

「……ええ。行きましょう、ハーツ」

深い、深い吐息の後、マリアンヌは再び人類の長たる姫としての凜とした表情で、ハーツに肯いた。

「守ろうね、人間たちの手で、全ての生物を」

「もちろんです。今こそ、人が人である世界を再興する時です」

マリアンヌが髪を揺らし、背を向ける。ハーツは再び羽を広げ、バルコニーから飛び上がった。吹きぬける風に、マリアンヌの髪と服が靡き、決意に満ちた表情で歩き出した。

「ねえ、トツティ。これからもしかして、戦争がまた始まるのかな

……？」

曇天の下、輝きのない冬に広がる人々の祈りを受け続ける銅像も、今にも降り出す雨に愁いの表情で空を見つめ続けている。その下で集い始める人々に、覇気はない。憔悴にやつれ、ただ、指示に従うことでひと時でも安心を得ようとしている。そんな程度にしか感情がない。「どうだろう。でも、姫様からの発表があるらしいから、その可能性もあるんじゃないか？」

トツティの腕を抱き、決して離れないようにしているのは、トツティの恋人、フィリア。

「また、人が死んじゃうのかな……」

それは単に恋人と離れたくないからと言うわけではなく、死という世界観が蔓延る世界において、繋がりを失うことへの恐怖からトツティの腕を抱えているような表情で見上げる。

「俺にはそれは分からないよ。ただ、姫様には直属のアンドロイド部隊があるんだ。今は話を聞こう」

「うん……」

二人には平穩の表情は出てこない。代わりにそれを求めるようにお互い首に下げているロザリオを握り締めていた。

「広場へ集合して下さいっ！ まもなくマリアンヌ様より今後のアイスの方針のお話がありますっ」

兵隊たちが集まる人々をまとめ始める。トツティとフィリアも誘導に従い、公園内にある広場へ、人の波の中の一つとして歩いていった。

「みんな疲れてるな」

「だって、もう昔の生活なんて、どこも出来ないんだよ……辛いなだよ」

ただ縋るしかない他国民たちを二人は神妙な面持ちで見つめる。

「安心できる世界なんて、初めからないんだよ。本当は」

「気づかないだけ、なのかな……」

歩きにくそうなトツティと、なお身を寄せるフィリア。

「マリアンヌ様の御登壇　っ！」

広場にある宮殿。元来この場は公園ではなく、貴族の屋敷として鎮座していたが、戦乱の中、戦火の影響をほとんど受けていないこの場を、難民開放の広場として公園と化した。

「あれがマリアンヌ様、なんだ……」

「大変そうだな、世界を導く姫だなんて」

市民たちの見上げる視線の先、複数の側近と護衛を引き連れたマリアンヌが静かに壇上に立っていた。そこへ、いまや機能をほとんど果たすことなくなった、数少ないメディアのカメラが全世界へそれを中継すべく、一斉にマリアンヌへレンズを向けた。

「国民の皆様、他国より難を逃れた方々、不安と緊張、日々の恐怖に身を休めることもママならない中で、今日、この場へお集まりくださったことを、深く感謝申し上げます」

いまや人類の頂点に立つマリアンヌが深々と頭を下げる。かつてであれば、いつせいにシャッターが切られる場面ではあるのだろうが、今やそのような状況下ではなく、ただ一斉に沈黙の波が目的の言葉を待つ。

「本日、全世界へわたくし、マリアンヌより皆様へ新たな人類の歩む道を検討して頂きたく、お集まりいただきました」

茫然とする者。疲れきり、その場に腰を下ろし、立ち上がる気力の無い者。マリアンヌを最後の希望と祈る者。言葉を待つ者。

「こう言う時、お姫様綺麗……とか素直に思えたら良いのにね」
「そうだな……」

そして、寄り添う者。多種多様にマリアンヌを見上げ、マリアンヌもその一人一人を見つめるように、息を漏らした後、その艶やかさのある口を開いた。

「現在、アースにはかつて六十億もの人々で豊かさを保っていました。しかし、現在把握している中での人口は、わずか五億人です。荒廃した国はもうありません」

現状の報告に、人々からは悲しみの吐息が空雲へ立ち上っていく。「これは人類史上の危機です。奇しくも人類外の生命には潤いとなるのでしよう」

人類は五億いるとは言え、世界の歴史上は空前絶後の危機。絶滅すら恐れられる現状。その一方で他の生物たちは人類を恐れることなく、食物連鎖を果たすことがほぼ可能となった。人類にそれを阻害することも、保護することも厳しいことが眼前にあるのだから。「しかし、このままではあらゆる生物は絶滅と言う結路を辿るでしょう。全ては犯さずの均衡に成り立ち、今、その均衡は打ち破られています。ここにお集まりの皆様、誰もが大切な方を亡くされたことでしょう。私も両親を亡くしました」

人々の目は、各々の心を支えていた人を思い描き、悲しみに暮れている。その中で懸命に声を絞り出すのは、誰でもない、マリアンヌだった。

「マリアンヌ様……」

フィリアがトツティの腕を強く抱く。その手にトツティが手を添える。心の中でマリアンヌを応援するように力強い瞳だった。

「悲しいことを、ただひたすら待っていては、人類に限らずこのアースに未来は来ません」

両親を思い浮かべているのか、マリアンヌの声は震えている。その瞳も今にも零れそうな涙がある。

「私たちには生き残り、アースを再生する義務があります。命を絶たれた人々の思いを、このアースの再生に馳せねばなりません」

静かに瞳を閉じ、涙を堪え息を整える。誰も急かしはしない。ただ、同じ思いを描くマリアンヌを見つめる。

「頑張れ、マリアンヌ様」

フィリアが思わず声を漏らす。

「……闘いましょう。再びこのアースに青い空が戻るその日まで。もう猶予はありません」

訪れる静寂。沈黙にマリアンヌの言葉は駆け抜け、曇天に消えていく。拍手もなければ反発も出ない。マリアンヌを不安にさせるような絶対的な静寂。

「そして、皆様へご紹介すべき方たちを、本日はここへお呼びしています。彼らは私たち人類を救うために、その命を顧みずに志願された方々です」

マリアンヌの言葉と同時に、一糸乱れぬ地鳴りを呼び起こす足音が公園の両脇から集った。それは全てが志願兵。

「このアースにて私たちに兵となる命を召集する能力はありません。けれど、彼らは私たちが願うアースの再興へお力添えを志願頂いた、勇敢なる兵士の方々です。どうかここへお集まりの皆様。わたくし、マリアンヌからのお願いです。彼らの歩み道を支え、共に私たちの未来を、アースの明日を切り開くことへの協力をお頼み申し上げます」

集まる人とは異なり、前進を武装した兵士たちは、覇気を背負い、

勝利を信じて強く佇んでいる。それでも人々は知っている。天も魔もその持つ力は強大であることを。そして、それを最も目の当たりにしたマリアンヌは、さらに言葉を紡ぐ。

「そして、彼らを率いるべく編成された、アースを救う新たな力を紹介します」

マリアンヌが天を仰ぐように、空に両手を差し出す。すると、それを合図に、空の厚い雲を貫く十二の光が眩い翼を広げ、大地へ降り立った。

「ね、ねえ、トツテイ……もしかして、あれが……」

フィリアがその姿に声を漏らす。

「あ、ああ。アンドロイド、だろうけど、空を飛ぶなんて……」

そこで初めて、集う人々の表情が驚きに変わる。アンドロイド自体珍しいものではない。家政的用途として用いられ、福祉や重労働の代役を担うことを目的に開発された。しかし、人々の目の当たりにするものは、まるで天界よりの使者。しかし、見た目は人であり、その翼は天でも魔でもない、白黒の翼。驚きに空気が多少ざわつく。「皆さん。私たち人類はこれまで紡いできた歴史を以って、新たなアンドロイド　十二の司士たちと、最後の戦いを、ここに決意します」

マリアンヌを中央に十二人のアンドロイドたちが静かに人々を見下ろす。巨体から歪な造物を持つアンドロイドとその姿は十二が異なる。それは救世主のようにも見え、脅威のようにも見えるが、この世界において、何も出来ない人は、それを見上げることが精一杯だった。

EP1・神の遊戯と開門（前書き）

ここから物語に入っていきます。

EP1・神の遊戯と開門

「神様？ 神様あ？」

純白の両翼を垂らし、紅長髪を揺らせる女天が辺りに視線を行き渡らせる。だが、その動きは急いでいるようには見えない。おっとりとし、のんびりとした歩みだ。

「あら？ どうしたのです、セラフィ？」

名をセラフィと呼ばれ、紅い髪が声の方とは逆に揺れた。

「ケルム、神様をご覧になれませんでしたの？」

「神様？ いいえ。私は見ていませんが。……もしかして、また脱走されたのですか？」

瞳に不相応な小さな眼鏡を鼻にかける黒髪を束ねた女天。両手と胸の中には幾冊かの書物があった。

「そうかもしれませんの。全く、あのお方は目を離すとすぐにこれですから困りますの」

頬に手を当て首を傾げるセラフィ。あまり困っているようではない。

「ドミニオンに頼んで搜索させましょう。セラフィ、あなたにはシエハキムをお願いしても宜しいですか？ 私はこれの処理に追われていますので」

ケルムが書物を少し掲げる。セラフィがそれは何？ とまた首を傾げ、翼も垂れる。

「地上界よりの輪廻の転生対象の記憶叢書そつしよです。送られてくる数は膨大ですから」

「分かりましたの。それでは発見次第、神座へ赴くよう伝えて欲しいのですの」

「承りました。それでは私も急がせて頂きます」

セラフィに対し一礼すると、ケルムは脇を通り過ぎて行った。

「ほんとうに困ったお方ですの。オフアム。オフアムはいるのですの

？」

セラファイがアポロスからアラボトへのミルキーウェイに出る前に神殿内に呼ぶ。アポロスは神の暮らす地。上級一位天使から中級三位天使までしか立ち入りは許可されておらず、下級天使にとっては神の姿を崇めることすら厳しく、また偉大であった。

「……でかい声で呼ぶな。聞こえている」

アポロスの神殿の壁に寄りかかる男天使が居た。鋭い目つきに背には身の丈を悠に越つする太剣を負う。

「オファム。貴方にお願ひがありますの」

「断る。俺に命令して良いのは神だけだ」

内容を聞くことなくオファムは壁から背を離し、歩き出す。セラファイは追いかけない。

「神様がいなくなりましたの。と言うよりも逃げ出しましたの」

オファムの足が止まる。首が少し振り返る。

「……何だと？」

「ケルムたちにはアラボトの搜索をお願いしていますの。セラファイもこれからシエハキムへ行きますの。なのでアポロスのよろしくお願ひしますの」

用件を伝えるとセラファイは翼を広げる。身体の数倍の翼は何一つの穢れのない白。その一枚一枚の羽が光に輝いていた。

「待て。俺が行く。そしてお前は自身の呼称を私と変える。己が呼称を自身の名で呼ぶ天使は貴様だけだ」

言うが早いか、オファムが同様の翼を広げ地を蹴り、空を煽いだ。セラファイの紅髪が揺れる。

「行ってもらえるのは楽なものですの。セラファイにはすることがありますの。それよりも、セラファイはセラファイとしか呼べないのですの。文句はあのお方へ言って欲しいのですの」

既に姿を消したオファムに、セラファイの文句など届きはしなかった。

時を同じくしてシエハキム。穏やかにして安寧なる神の地。

「んふあああ〜」

生命の木の下で、一人の男が横たわる。頭部には女天使の膝枕。片側には女天使の扇風。その逆には女天使の弦楽器の音色。

「大きなあくびですね、神様」

柔らかい天使たちの優雅な笑み。静かで穢れのない薫り高いひと時。

「んああ？ 最近はやあ、何かと騒がしいじゃん？ 忙しいったりやありやしねえんだよ。セラフィとかケルムの奴もうるせえしよあ」
「あらあら、と笑みが男を包む。

「ダメではありませんか、神様。それがお仕事なのですよ？」

シエハキムに居る女天使たち。その全てがアポロスに使える天使中級一位ドミニオンズ所属の中級天使。

「んなこたあ分かってるっつーの。でもよ、地上界にだって仕事の休み日っつーんがあんだろ？ 四六時中働きっぱなしなんざやってらんねえっつての」

天使たちに包まれ、男は全身の力を抜き、女天使に身を委ね続ける。まさに神の安息の地となっている。

「もお、今日だけですよ？ セラフィ様に見つかっては大変ですから」

「あー、やっぱお前らは天使だよなあ。くう〜、どうしてアポロスの奴らはこう、優しくねえのかねえ」

男が天使の太ももに頬を寄せる。天使たちはにこやかに笑うだけで、拒否することが無い。それはこの男がこの世界を生み出す親でもあるからだ。

「神様、喉は渴いておりませんか？」

そつと差し出されるは、生命の木に成る実を絞ったジュース。光を纏い輝いていた。

「おお、気が利くな。どれ、今日の味は……ん……ん……かあつ！
うっめえっ！ さすがは生命の木。やっぱいい味してるなあ」

穏やか過ぎる時が、シエハキムには流れ続ける。反対側は地獄で

あろうと、関係なしに。

「んっ!？」

不意に男が女天使を抱えて飛び上がる。女天使たちの小さな悲鳴の下、何かが入れ違いに通り過ぎ、地に落ちた。

「ふんっ。相変わらず勘は良いな、神よ」

「オ、オファム。お前な……俺を殺す気か？」

大地に突き刺さるは大剣。突き刺さる瞬間の風が野を波打った。

「ふん。この程度で死ぬような男を神に持った覚えは無い」

オファムが剣を抜き、背に背負う。重量があるにも拘らず、片手で扱う力は絶大。だが、神と呼ばれる男はそれを容易に避ける。女天使を三人抱きかかえながら。

「俺も神を殺そうと仕掛けてくるアポロスの天使を持った覚えは無いけどなっ」

男が降り立つ。

「ドミニオンズよ。お前たちもお前たちだ。この男の仕事への放棄ぶりは存じているだろう。甘やかせるな。この男は付け上がるだけだぞ」

三人の女天使が階級が数段上のオファムに叱責されて、俯く。

「おいおい、俺が呼んだんだっつーの。こいつらを責めんな。お前の管轄じゃねえだろうが」

「責様が仕事すれば良いだけの話だ」

女天使にフォローを入れた瞬間に、自身を責められる。

「俺が仕事を命じてるのは、お前らだ」

「して、自身は娯楽に身を置くか。飴と鞭。使い分けも出来ぬ墮落者が恥を知れ」

「だあかあ、それをフォローする為に、天使がいるんだろうがよ」

神がドミニオンズの女天使たちを強く抱き寄せる。女天使たちは、誰一人として嫌がる顔をしない。むしろ、それを喜びのように笑顔だ。

「俺は貴様の啓示を地上界、並びに天界へ仕る任がある。しかし、同時にして、貴様の右腕でもある。主が恥を掻き消すは、俺が任」
「おお、分かってんじゃんかよ」

神の言葉に、オファムが剣の切先を神の鼻先に突きつける。

「無論だ。邪心は天界に不要。ならばこのオファム。正すのみ」

「俺かよっ。俺は神だぞ。ルシファーに言えよっ、そういうことはよっ」

言葉は大げさな反応を見せるが、行動は実に落ち着いている。女天使を後ろに移動させ、切先を掴む。オファムの表情に違和感が生まれていた。

「奴は魔界が主。俺の使命に関係はない。しかし、天を治めし我らが神ならば、アポロス直属が戦神オファム。貴様の精魂、叩きなおしてくれる」

「やれやれ、出来るものならやってみる。その気もないくせに言う台詞じゃないぜ？」

髪と呼ばれる男と、太剣を突きつけるオファムに、天使たちが不安な視線を神に向ける。

「悪いな、なるべく離れてな。怪我するぜ？ いや、俺の勇姿に火傷するぜ？」

こんな時でも神は笑っていた。天使たちは、いやぁん、と色っぽい声と黄色の声を残し、男たちから離れていく。

「さて、と。やんのか？ この俺と？」

天使たちの姿が小さくなると、神がオファムを挑発するように髪を流しつつ問いかける。その表情は楽しげであり、絶対的な自信がある。

「無論。一人遊び呆ける神など、天界には不要」

言い終えると同時にオファムが剣を古い、翼を広げて男へと襲い掛かる。薙ぐように振るわれる剣を男は後退してかわす。オファムの振るった剣先から、波紋のように強力な風が吹き荒れ、男が着地しても男の足は風に押された。

「本気かよ、お前」

神の髪と装束がたなびく。一面の草原の草も風の向きに傾いている。遊びの攻撃ではなかった。

「余裕も切迫にしてくれる」

剣を振るい、体の重心が移動したオフアムが、今度はそのままの重心を利用して、反動的に攻撃するように逆方向に今度は剣を振るう。男は地を蹴り飛び上がる。風がどこまでも広がる草原を駆け抜け、男の表情に関心が見て取れる。

「飛んだ所で不変なり」

オフアムが男と同じように地を蹴り飛び上がり、下から剣を突き上げる。

「うおっ」

その速度は尋常ではなく、男も切先ギリギリで宙で身を反転させて回避する。しかし、それを見越していたようにオフアムの刃が反転して体勢が元に戻った男へと振るわれる。

「なわっ、つつ、おっ」

連続して襲い掛かる刃に、男は器用にそれをギリギリで回避する。オフアムの切先から生まれる風が地上を強く靡かせる。

「……ちっ」

それでも攻撃が当たらないことに、オフアムが舌打ち混じりに男を追う。

「オフアムっ、おまつ、ちよっ！」

男が何か言いたげだが、それを遮るようにオフアムの剣戟が飛んでくるため、言葉が続かず、男は避け続ける。

「避けてばかりいるな。俺を侮っているのか、神よ」

そしてオフアムは一向に攻撃を仕掛けてこない男に煮え切らないものがあるようで、攻撃を促すように攻撃を繰り返す。

「おいおい、良いのか？」

そして、男は少しずつ余裕を取り戻してきたのか、前後左右上下の見境なしに剣を振るい、攻撃の術を与えんとするオフアムの攻撃

を宙で器用に体を捻らせ避けつつ、笑っている。

「一撃の攻撃もなく神を倒した所で、誇るべきものはない」

「おわっ、くっっ！」

振るっていた剣を肘を引いて納めたと思わせた瞬間に、剣を男へ突き出す。回避に体を捻っていた男が、それに気づいた瞬間、その切先は男の腹部を捕らえ、回避の猶予を与えなかった。

疲労を知らない剣戟に、男の表情に苦渋が浮かんだ。回避する暇はない。受け止めるにもオファムのように男は武器の類を一切有していない。生身の体を貫く太い切先が空間すら突破するような素早さで男へと突き抜けた。

「ふんっ」

オファムが手ごたえを感じたのか、眼前にいる息を呑んでいるように表情を固めている男の瞳に鼻で笑う。男は疎オファムの切先をかわしきれなかった。

「油断は死をもたらす。故に貴様には隙が多かったことが敗因なり」
「うっ……な、あ……」

それでもオファムは剣を収めることなく、さらに突き出そうと前へ腕を押し出す。男の顔から戦意が喪失していく。声にならない継ぎ接ぎの言葉だけが、無情にも男の口から零れた。

「神の終焉とは、いかなものだ？ 神よ？」

オファムが勝利に問いかける。その間も剣を引くことはない。

「そう、だな。どうせ、殺されるなら、女が良かったかもな」

オファムの問いに、神といわれる男は振り絞った声で、ゆっくりと答える。そして、その最後まで下らない答えに、オファムは無情にも思えるように、乱雑に剣を抜いた。刃に支えられていた男が、地へと落ちる。それは神の死を表す光景であり、静寂の中で、男の体はまるで羽のように静かに草原の中へ落ちた。

「ふんっ！」

だが、オファムはそれを見届けることなく、剣を抜いた勢いで、シエハキム内に生える大木へ向けて剣を投げた。

「うおっ！」

地上に落ちた太剣が大木を貫き、地上へ砂煙を巻き上げ、突き刺さり、大木もゆっくりと草原に倒れた。そしてその中から男の声がした。

「あつぶねえなあ、おい」

砂煙の中からの天使たちよりも輝く翼を広げた男が宙へ飛び上がる。今しがたオファムの太剣に体を貫かれたはずの神が、そこには浮かんでいた。

「戯言を」

「つたくなあ、シエハキムを荒らすなよ。直すのは俺なんだぞ」

と、神が自らの羽を一枚抜き、そつと息を吹きかけ、太剣が地を抉り取った場へと吹き落とすと、黄金に輝く羽が光を放ち、その場を包み込んだ。淡い光の中で失われた自然が回復していく。まるで何事もなかったようにその場は再び緑が萌えていた。

「造作なきこと。所詮貴様に俺が勝てることはないのだからな」

そしてそれを見届け、なお対峙するオファムの口から、そんな言葉が出た。

「当たり前だ。お前に負けてたら今頃魔界に支配されてんだろうが」
そして神も当然のことだと、軽い口調を崩さない。

「セラフィが貴様を探している。仕事に戻れ」

そしてオファムはそのまま戦意を見せることなく、神の横を通り過ぎ、太剣を取りに地に降りた。

「何だ？ もう戻るのか？」

神が浮かんだままに問いかける。

「地上が動く。遣天使の派遣だ。貴様が出る幕ではない」

そのままオファムは用件が済んだのか、シエハキムから、再びアポロスのアラボトへ向かって翼を広げ、飛び立った。

「ほお、いよいよってわけか。こりゃ、一見の価値はありそうだな……」

神はその言葉に、好奇心を持つ子供のように楽しげな眼差しでシ

エハキムから同じように飛び立つ。シエハキムの女天たちがオファムと入れ違いに戻ってきたが、その相手をするよりも有意義だと見出したように飛び去る。

その頃、天界・魔界・地上界を繋ぐ天上門では、緊迫した空気が多少なりとも漂っていた。

「地上界のエンジェルスより通達。これより地上界遣天使一団が天界、魔界へ派遣されます」

天上門のある天界第二天ラキアでは、天上門を監視するのは下級一位のプリンシパルティーズの天使。

「オファム様より遣天使一団の来訪を受諾を認証。これより天上門の開門申請を魔界側へ通達します」

機械的ではない。地上界の機械文明など天界には存在しない。天魔においての通達は直接の応対。プリンシパルティーズの天使が天上門を挟んで存在する魔界側の管理者の下へと向かう。

「天界下級一位プリンシパルティーズ所属天使、ルミアです。開門申請が一つを通達に参りました」

ルミアの背中は天界の眩い光に溢れているのに対し、足元を川のように巨大な門が横たわり、対岸の魔界側はその対極の黒で多い尽くされ、二つの世界の狭間が一目で把握できる。ルミアは天界側の岸に立ち、その対岸へ呼びかける。

「こちら魔界ベルゼブル隊所属、ヒルコット。ルシファー様より同用件の申請を行います」

すると、魔界側の管理者が姿を見せる。小柄なルミアに比べての比較的大柄の魔族。天使は人が原型を示すが、魔族はそれがなく、ヒルコットも人や天使の姿かたちではなく、何かの獣を象らせる原型のように、その姿は歪だった。

「では、両界による同一申請は相意により、天上門の開門を行います」

「魔界はこれを受諾します」

二人のやり取りは実に事務的。対立する勢力の中で、この天上門が横たわる空間は互いにおいての不可侵領域。だからこそ、管理者によるやりとりも緊張感を孕んでいるが、双方において敵視による戦意は見受けられない。ルミアもヒルコットも共に部下でしかなく、上の指示に従い、行動するだけのようで、二人は天上門に両手を翳す。

「我が天界を守護せし天上門よ」

ルミアの小さな手のひらの先に白い光が浮かぶ。

「我が魔界を隔てし天上門よ」

ヒルコットの歪で不気味な細長い腕からは黒い闇のようなものが表れる。

《双意により、その隔壁されし世界の扉を開放せよ》

二つの声が重なると、双方に宿った白黒の光が互いを攻撃する光と闇のようにお互いへと放たれ、天上門の中心部辺りで衝突し、天上門へ稲妻のように落ちる。すると、それが門を開く鍵のように、天上門が青白く光を放ち、それこそ二界を挟む川のように光を纏いながら、ゆっくりと地上界に向かって二つの扉が開いていく。青い扉が開くと、そこには青い空が迎えていて、その下には一面の白い雲が、まるで天上門を覆い隠すように広がり、その中に二つの小さな姿が雲の切れ間へ降り注ぐ光の中に浮かんでいた。

一つは天界への地上より派遣されし遣天使。周囲をエンジェルスに守護され白い光の中で天上門が開かれるのを待つ。

そして、もう一つは魔界最下級の魔女たちによって囲われる遣魔使一行。遣天使とはことなり、魔女一団は光も病みも纏わず、ただその姿を黒の装束で覆い隠し、表情一つ見られないただだが、その魔女に取り囲まれている人間は、地獄へ誘われる罪人のようでもあった。

天上門が開かれると、それぞれの一団が静かに門を潜り、それぞれが降り立つ地へ誘われた。

「ようこそ、我らが天界へ」

「よくぞ参られた。この魔界へ」

ルミアとヒルコットがそれを迎え、双方がその世界の深き所へと導くと、天上門は再びその堅い扉を閉ざした。

EP1・神の遊戯と開門（後書き）

次回更新は「ハウンと犬の解消記」ですが、現在文学賞用作品の執筆が、切間近なので、更新予定日は大幅に遅れての12月26日を予定させていただきます。

EP2・大天使ラジエルの気まぐれ（前書き）

えー、長らくの更新、すみません。

まさか最終更新が去年だとは思わず、遅くなっていました。

今回と次回は天界と魔界の新キャラを登場させます。

気まぐれな更新にお付き合い下さり、本当にありがとうございます。

EP2・大天使ラジエルの気まぐれ

天入門が開かれると、天界は少々賑わいを催していた。

「んあ？ やけに騒がしいなあ？ 何事だあ？」

アポロスの神殿の傍らの庭園で横になっていた男があちこちで天使たちがざわついている様子に体を起こした。天使たちとは異なり、纏う装束も上級位天使たちのように独自の階級を示唆するような白と赤の布を纏い、白髪交じりの年配者のような風貌。だが、決して置いているわけではないように、身軽に白銀の翼を広げた。

「おい、何かあったんか？」

そして、近くで話をしていた女天使たちの元へ歩み寄った。

「あ……ラ、ラゲエル様。このような場所でいかなされましたか？」

男、ラゲエルの声に驚いたように女天使たちが跪いた。しかし、その表情は、驚きに包まれていた。

「ああ、いい。顔上げろつて。それよりも何だ？ やけにアポロスが騒がしいな」

「はい。現在ラキアの天入門より、地上界遣天使一団が到着したとこのことで、間もなくアポロスにて会合が催されるらしいのです」

「地上界？ ……ああ、いよいよつてわけかあ」

ラゲエルが思い当たったようにひげを撫でた。

「で、神様はどうした？」

「それがシエハキムよりお戻りになられて以降、セラフィ様、ケルム様に連れられ、神座にていつもの状態に……」

女天使の一人が言いにくそうに語尾を濁す。それに続くように他の天使も視線を落とす。

「全く。あの小童は何をしてんだかなあ。ところで、会合には誰が出る？」

ラゲエルがやれやれ、と神に呆笑する一方で、話題を即座に切り

替える。

「オファム様が代行を決定される予定となっております」

「オファム、ね。あの固い男に務まるのか気になるな……」

どこか面白そうであり、どこか憂うように、ラグエルが一息つく
と、神殿の方へ歩き出す。

「ラグエル様？」

「ちいーとばかり気になるから、同行する。俺を呼びに来る天使が
いたら、後にしろと伝えといてくれ。それからお前ら、おしゃべり
も良いが、ここはアポロスだ。神の御前である以上、仕事に勤しめ
よ」

ラグエルは階級は比較的高いようで、その申し出に、天使たちは
止めることはなく、深々と一礼し、少々萎縮したように再び跪いて
いた。

「さてさて、人間を見るのは久しぶりだな。天使ばつかはやつぱ飽
きるからなあ。いつちよ人間観察でもしてくつかねえ」

頭をかきながら、ラグエルはアポロスの中へ入っていく。その姿
を見かけた天使たちは、即座に端へ移動し、ラグエルが通り過ぎる
のを一礼して見送っていた。神殿内に入ると、賢覧で煌びやかな装
飾品と、天界を示す純白の輝きが穢れのない世界を演出する。上級
一位から下級第三位までの天使たちが行き来する様子も、気品があ
り、涼やかで静かであり、凜とした爽やかさに包まれている。その
中を歩くラグエルは、一人翼を広げ、悠然と神が歩くとされ、広き
回廊の中心路は天使が誰一人として歩くことなく、端を歩いている
が、ラグエルはその回廊の中心路を堂々、というにはいささか疑問
がある足音を立てながら気ままに歩いていった。

「大天使ラグエルよ、待たれ」

神殿内を歩くラグエルに、気安く声をかける天使は誰一人として
いない。アポロスにいる中級以上の天使でさえ、ラグエルを見ると、
一瞬驚きの表情を見せ、すぐにかしこまるように道を開ける。

「座天使オファムか。俺に何か用か？」

だが、神殿から神座へと続く光の回廊を歩くラグエルの前にオフアムが静かに佇む。

「何故にここへ参るか？ 貴殿が役は天界における天使が善行を監視することであろう？ アポロスが天使は神直属。その役には含まれぬはずだ」

ラグエルの階級は大天使。しかし、下級二位のアーケエンジェルズと同じくの大天使であるが、根本が異なる。神による直属配下がアポロスであるとすれば、大天使ラグエルに与えられし権限は天界に住まうアポロス以外の全ての天使の監視。ゆえにアーケエンジェルズという大天使という階級ではなく、全ての天使の頂上に立つ、七大天使、またの名を、七人の神の御前天使と称されるほどに高い階級と、絶大な力を持ち、直轄する天使は、主にアーケエンジェルズを主体とする。セラファイたちアポロスにて神に仕える天使以上の階級を持つのは、ラグエルを含めた七人の天使である。

「そんなことは承知しているさ。俺が来たのは、遣天使との面会の為ってもんよ」

監視するつもりはない、と、手をひらつかせるが、オフアムの表情は固い。

「遣天使との面会はドミニオンズ指揮官ハシユマが担当することを推薦し、セラファイ、ケルビムの承認を受けている。貴殿が立ち会うに値する人間ではないということだ」

ドミニオンズは、天界、地上界、魔界の三世界のあるべき姿の統治を仰せ付かる。そして、主権と言う立場にて、最前線にて相手との交渉に臨むのもまた、与えられた役であった。

「生憎様だが、俺は俺の意見での判断が神様より許されている。だから、問題なしってわけさ」

オフアムはあまりこの先へ通したくはないようだが、オフアムの忠告を受け入れなければならぬ身分ではなく、むしろオフアムがラグエルに従うのが階級としての差ゆえに、オフアムはその言葉に良い返すことが出来ず、表情を澁らせるばかりだった。

「なあに、心配ないさ。俺は単に久々に人間を見て見ただけだ。無駄な口を挟むつもりはないぞ、と」

じゃあな、とオファムの肩を軽く叩き、ラグエルは揚々とオファムを追い越し、神殿奥へ歩いていく。

「天使を監視すべくこの神の友、か……。認めたくはないぞ、俺は」
ラグエルの後姿に、オファムは納得いかない面持ちで、それを見つめていた。まるで、神に近いラグエルに嫉妬するような鋭い視線で。

「さてさて、お邪魔しますよつと……？」

そして回廊を歩いた先にある神がおわす場である神座のある室内の巨大な扉をラグエルが開けた瞬間、その意外な光景に足が止まっていた。

「全くう、神様、あなたは神様であられるのですから、いつまでも子供のような真似はやめていただきたいのですの」

「まさかシエハキムまで行ってらしていたのには、さすがの私も調停は出来ませんよ？ この三世界の均衡が崩れている今とあってわ」

セラファイが少々呆れ顔で頬に手を添え、反省を促し、ケルムはアラポトにいたのであれば、アポロスの階下だけに庇うのだろうか、シエハキムは第三天。最上界第七天からは比較的距離がある。

「これまでも神様、あなたの度々の抜け出しにはアポロスの天使たちは困っているのです。プリンシパリティーズ、パワーズ、ヴァーチューズの中位天使にはその度に天界中を探し回り、私たちも使い魔を出し、わざわざ仕事を後にしても探してきたのです。日々多くの魂を循環させる為にアポロスの天使が働いている中で、あなたは何をしているのですの？」

「確かにそうですね。中位天使はそれぞれアポロスだけではなく、大天使の元で各階層での職務もあります。私たち上級位はアポロスから出るには隊を率いなければなりませんし、地上界だけではなく、魔界よりの誘惑への対処も、大天使ラグエルだけではなく、私たちも常に監視しなければなりません。その上セラファイは天使隊の総訓

練を勤め、私はエデンの園の管理もあります。オファムも実戦部隊として前線に立たねばなりませんから、神様には自覚と品格をお持ち頂き、職務に励んで頂かなければアポロスの天使たちだけではなく、各階層の大天使様たちにもご迷惑をお掛けすることになってしまいますね」

二人が視線を向ける先、その二人の叱責の言葉に身を小さくしている男がいた。神が座る為だけの輝きに満ちた神座には誰も腰を下ろさず、その下の段に男は正座をさせられていた。

「あゝあ、情けないねえ、創造主たるもんが」

その様子に、ラグエルが後頭部を搔きながら、歩み寄る。

「宜しいですの、神様？ いくら天界が平穏であつてもですの、世界の均衡は崩れつつあるのですの。それを先頭に立ち、管理をすることが神様がしなければならぬ仕事ですの」

「神様にしか出来ないことがあるのは事実ですし、それをそろそろいいかげんに弁えるべきではありませんでしょうか？ もう、この世界において神様、あなたがその頂に立つ立場なのですから」

ラグエルが来ていることに気づいていないセラフィとケルムは依然として神に説教を説く。

「いや、でもな？ 俺だつて休みくらい、だな……お、おう」

「必要なんだぞ、と神が顔を上げた。だが、見上げた先で、セラフィとケルムの呆れている表情とお怒りの表情に、声をすぐに飲んだ。休んでばかりの神様に、更なるお休みが必要ですか？」

「むしろ、私たちに休息を与えて下さるくらいの働きをしても宜しいかと、不肖ながら、私も思います」

「いや、だからな？ 俺はサボつてたんじゃなく……」

あちこちに出かけるのは視察の為。そう言おうとする神様ではあるが、セラフィはぼわわんとした面持ちではあるが、瞳に笑顔はなく、ケルムも眼鏡を上げながら、きりりとした表情で呆れたように神を見下していた。

「言い訳でしたら、もう少しマシなものをお考え下さいですの」

「そもそも神様は、わざわざ階下に降りずとも、アポロスから全てを把握出来ますでしょう？ その言い訳はさすがに見苦しいかと思えますよ」

ぐうの音も出ないのか、事実だけに神と讃えられるはずの男は肩身狭さにしゅん、と小さくなるしかなかった。

「まあまあ、その辺りにしてやんな、セラフィム、ケルビムよ」

すぐそばにまで来ても気づかれない様子に、ラグエルは自分から声をかけ、三人の視線がラグエルに止まる。

「これはラグエル様ではありませんの」

「ラグエル様？ 何故、このような場へ？」

「おおつ、ラグエルじゃねえかつ」

セラフィとケルムの二人は意外そうにし、神は助け舟が来た、とでも言うような嬉しげな視線を向けた。

「神様の所業はいつものことじゃないかい、お二人さんよ。二人が何を言った所で聞く耳はないと言うのが俺の見解だ。それよりも、ちよいとばかり、俺の話を聞いてくれや。な？」

神のことを熟知しているだけに、言える軽口。だが、ラグエルが神と二人の間に入り、落ち着け、と手をひらつかせ、二人とも傅くように静かになる。

「何だよ、お前ら。ラグエルには頭下げんのかよ……いや、何でもない」

その様子が神には不快のようで、二人にぶー垂れるが、二人の鋭い視線に、すぐに小さくなった。神ともあるう者が随分と身分の小さいものだった。

「お話、でございますの？」

「何か急を要するものではありませんか？」

「いやいや、そういうわけじゃないんだよな。ちよいとお願いをね」

少し不敵に、いやらしく笑うような声に、セラフィとケルムは顔を見合わせて神を見るが、神もまた、思い当たる節はないようだった。

「お前が頼みごととは珍しいな。で、その用件は何だ？」

神が立ち上がり、ラグエルを見る。立ち上がる神は、セラフィとケルムよりも大きく、黄金に輝く髪が広がり、先ほどの風体が消えうせ、神聖なる光に満ち溢れた。

「この後、ここで地上界との交渉があると聞いちゃってな、ぜひとも俺にも同席させてくれませんかね、と」

ラグエルの言葉に、三人が視線を合わせた。

「会合の担当官はどちらでしたのです？」

「オファムの推薦でドミニオンズ指揮官ハシユマが担当することになったはずです」

セラフィアとケルムが顔を合わせ、男もそこに混じるように視線を向けて言う。

「ハシユマか。それなら別にお前が出なくても良いだろ？」

神もオファムから話を聞いている以上、大天使が自ら出る必要はないと言うが、ラグエルは引かなかった。

「別に何かを進言するわけじゃないんだ。ちょいとばかし人を久しぶりに見たいと思う、俺の興味本位だけさ。会合の邪魔をするつもりはないんだし、別に良いだろ、神様よ」

セラフィアとケルムが神を見る。二人は神直轄の天使であるが、大天使はその上にいる最上位の御前天使。二人から反対も賛成も出せないのが階級の差。

「まあ、別に良いか。ただ、余計なことは吹き込むな。おそらく魔界にも宣戦布告に遣魔使が派遣されただろうからな。それから、ハシユマもお前の監視対象とは言え、この場においてはハシユマが手動を握る以上は、わざわざ監視はしなくて良いからな」

「分かっているさ。俺もただの興味につられたただけだ。仕事は持ち込みはしないさ」

そういい残し、ラグエルが背を向け、室内を後にする。

「宜しいのですの？」

「私としては、ラファエル様の方が相応しいように思うのですが…」

…」
二人が、神を見る。

「構わんさ。あいつが興味って言うなら、それ以上でもそれ以下でもない。確かにケルムの上官のラファエルなら人間の話を聞いてやれるだろうが、今は人間が反旗を翻してもおかしくはない状況だ。ラジエルの観察眼に任せるほうが得策だろう」

そのまま神は神座に腰を下ろす。神の言うことである以上、かつ、ラジエルが大天使である以上、セラフィとケルムはそれに従うことで話が終わる。

「さて、これから人間がどうするか、見ものだな」

神は悠然と腰を下ろし、二人の上位天使をそばに置いて笑っていた。

「ハシユマ」

神殿内部にある大会場。そこに足を運んだラジエルは、既に会場の用意を整えたハシユマを見つけた。

「ラジエル様っ？ いかがなされましたか？」

思わずの登場にハシユマは驚いたように慌ててラジエルの傍で傳いた。

「今回の会合、俺も参加させてもらうことになったんでな、よろしく頼むぞ」

「えっ？ それは誠にございますか？」

「ああ。神からも断りを頂いた」

さらなる事実、ハシユマが緊張したように動きに若干にぶりが出た。

「固くなるな。俺は今回は同席するだけだ。別に監視する為にきたわけじゃない」

「そ、そうでございますか」

それでもハシユマにしてみれば、ラジエルは神に最も近い存在である大天使。緊張しない方が無理といわんばかりに、恐縮してい

た。

「で、遣天使はまだ来てない、と？」

「はい。現在私の部下がこちらへ向かっているとのことで、今しばしのお待ちを」

「人間が天界に来るのは、いかぶりかねえ。ま、気長に待っていてよ
うじゃないか」

どこか気だるそうな、やる気のさほど感じられないゆるい態度ではあるが、ハシユマの緊張を見る限り、普段からその態度をするこ
とで他の天使の油断を見て、審査しているようで、ハシユマはしき
りに自身の羽を気にしたり、金髪を整えていた。

「地上界より遣天使ご一行の到着にございませう」

やがて、案内役の天使の声が扉の向こうに、くぐもって聞こえる。
「さて、お出ましか。ハシユマ、流れは任せるから、しっかりして
くれな」

「はいっ、承知いたしました」

そして、扉が開かれる。眩いばかりの光に包まれる、ラジエルと
ハシユマが向かえる先に、天使たちに連れられた、人間たちがその
姿を静かに映し出した。

EP2・大天使ラジエルの気まぐれ（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回更新予定作品は、これまた長らくの更新停止中の
「ハウンと犬の解消記」です。

更新予定日は、5月25日前後を予定します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7241e/>

三世界戦争 ～神と王と少女と～

2010年10月8日23時22分発行